

「五蘊次第」雑考

井上智之

一般に現代の仏教学において五蘊は、色・受・想・行・識の五つであり、その順序については特に問題にされていない様である。初期仏教においても五蘊の順序が如何なる理由から成立したのか、またその順序が何を意味するものであるのかといった論究は、全くなされていない。それら五つは飽くまでも一つの集合体として考えることによって我という個別存在、或いは我所という個別存在に附属するものに対する執着を離れることを目的としているのであって、順序に関しては特に問題にしていないのである。

しかし、アピダルマ文献においては、「何故、五蘊がその順序を取るのか？」（云何五蘊次第）ということについて様々な理由づけをしている。そして、その説明においては必ずしも色・受・想・行・識という順序に限られていないものもあるのである。

本稿では、『瑜伽師地論』の「五蘊の順序に対する理由付け」の内容を中心に考察をしてみたい。

＊

『瑜伽師地論』では五蘊の順序に関して五つの点から説明を加える。つまり、

復次云何諸蘊次第。謂説作別復五種応知。一生起所作。二対治所作。三流転所作。四住所作。五安立所作。^①

という五つの理由づけをしているのである。

この内、第三番めの流転所作と第四番めの住所作、そして第五番めの安立所作の三つの説明は色・受・想・行・識という一般的な五蘊の順序に対する説明である。一方、第一番めの生起所作は色・識・受・想・行という順序、第二番めの対治所作は良・受・識・想・行という順序に対する説明である。

先づ、色・受・想・行・識という一般的な五蘊の順序に対する説明から見てみよう。

(i) 色・受・想・行・識という順序

先に挙げた『瑜伽師地論』の内容をもう少し詳しく見てみよう。先づ流転所作については、

流転所作者、根及境界為依止故。於現法中由二種蘊受用境界起諸雜染。謂領納境界及彩画境界。由一種蘊造作一切不善業。於後法中起生老等一切雜染。一是所染故最後説。^②

と説かれている。流転の所作というのは、つまり「現在に於いて外界の対象である色蘊を感受し（受蘊）、心の中に映像を描写すること（想蘊）によって善或いは不善の行為をなす（行蘊）。それ故に未来に於いて雑染が生じる。そして、その染汚されているのは識蘊である」というのであって、謂わば、雑染が生じる過程に沿って色・受・想・行・識という順序で配列されるというのである。

この説明とよく似た内容は『毘婆娑論』中にも見出すことが出来る。つまり、

復次從無始來男女於色更相愛染故先説色。更相愛色由貪受味故次説受。此貪味由顛倒想故次説想。此顛倒想由煩惱生故説行。一切煩惱依識而生染汚諸識故後説識。^③

と説かれているのである。この内容は *AKBh.* にも見られるものである。^④

次に住所作の説明を見ると、

住所作者、由四識住及識次第而説。是名住所作。^⑤

と説かれている。つまり、色・受・想・思（行）という四つの識の住み家と識という順序に随っているというのである。

次に安立所作の説明を見ると

安立所作者、謂諸世間互相見已先了其色。是故先立色蘊。次由受蘊知彼進退或苦或楽。是故次立受蘊。次由想蘊知彼如是名如是類如是性等。是故次立想蘊。次由行蘊知彼如是愚癡如是騷擾。是故次立行蘊。後由識蘊安立内我。謂於諸蘊中安立所了有苦有楽。隨起言説及愚智等。是名諸蘊安立所作宣説次第。^⑥

となっている。この説明は心によってものが知覚される順序を示している。『毘婆娑論』を見ると、この安立所作と先の

住所作を併せた形で説明されている。つまり、

復次依界地故説五先後。謂欲界中有諸妙欲色相顯了故先説色。諸靜慮中有喜樂等受相顯了故次説受。前三無色取空等相顯了故次説想。有頂地中思最為勝行相顯了故次説行。色等四種即四識住。識是能依故最後説。

と説かれているのである。この説明は *AKBh* にも見出すことが出来る^⑧。

以上、『瑜伽師地論』が説く「五蘊の順序に対する理由付け」の内、色・受・想・行・識という一般的な五蘊の順序に対する説明を見てみたが、それらは表現に相違はあるが意味内容としては説一切有部の説明と同じであることが判った。

(四) 色・受・識・想・行という順序

先に紹介した『瑜伽師地論』の5つの説明の内、第二番めの対治所作では色・受・識・想・行という五蘊の順序が紹介される。つまり、

対治所作者。為欲対一治四顛倒故説四念住。謂於不淨計淨顛倒。於苦計樂顛倒。於無我計我顛倒。於無常計常顛倒。此中先説色蘊。次説受蘊。次説識蘊。後説想行二蘊。是名対治所作宣一説次第。

と説明している。つまり、不淨である身体を淨と見る過、苦と感受すべきなのに楽として感受する過、無我である心を我として捉える過、無常である法を常住であると考える過を対治するために四念住が説かれている。

四念住とは、身体を不淨と観ずる身念住、受は苦と観ずる受念住、心は無我なりと観ずる心念住、法は無常なりと観ずる法念住のことであり、この四つの観察の順序にしたがえば、色・受・識・想・行という順序になるというのである。これと関連する記述が『婆沙論（新訳）』の中に見い出せる。すなわち、『婆沙論（新訳）』卷第八十七では、反対に四念住の順序について、

有説。為対一治五蘊故。謂対一治色蘊故説身念住。対一治受蘊故説受念住。対一治識蘊故説心念住。対一治想蘊行蘊故説法念住。

として、五蘊の順序を色・受・識・想・行としているのである。また、同じく『婆沙論（新訳）』では、四念住と五蘊の関係をさらに詳しく説明して、

何故諸瑜伽師先起身念住。乃至後起法念住耶。答依蘊細次第故。謂五蘊中色蘊最麁。故先觀察起身念住。四無色蘊中受蘊最麁。故次觀察起受念住。問受等無方所。如何可施一設蘊細耶。答雖無方所蘊細而有行相蘊細。亦可施設。此中受行相蘊如説我手足等痛。又説我受如是如是苦故。受等蘊雖非色而如色施一設蘊細。四無色蘊中識蘊最細。而先想行蘊觀察起心念住者。以想行蘊与涅槃最微細法合施設故。彼最後觀察起法念住。

と述べている。この説明は四念住の順序を粗いものから細かいものへという順序であるとしているのであるが、『毘婆娑論』においては色・受・想・行・識という五蘊の順序について

復次随順蘊細次第法故。謂五蘊内色蘊最麁故仏先説。於四蘊内受蘊最麁故。次色説。問受等四蘊無方処無形質故。如何可説有蘊有細耶。答雖無方処亦無形質。而依行相立蘊細名。如世有言。我手足痛。我頭腹痛。我支節痛。痛即受。以受如色可施設故。於無色蘊説受最麁。於三蘊内想最為麁。女男等想易了知故次受後説。於二蘊内行蘊相麁。貧瞋癡等相易了故次想後説。識蘊最細總取境相難了知故最在後説。

と述べられている。

先の四念住の順序を説明する個所でも、一旦、この色・受・想・行・識という順序を認めているのであるが、にも関わらず想・行よりも先に識を説くのは「想・行は涅槃という最も微細な法と合して施設されるからである」というのである。

涅槃が最も微細な法であることについては『瑜伽師地論』卷第八十七に、

又此涅槃極難知故。最微細故。説名甚深。

と見い出せる。確かに涅槃とは、まさしく煩惱の対治された状態を言うのであるから、そのことからすれば識の後に想・行、すなわち顛倒の想と諸煩惱が説かれるのは当然とも言える。しかし、色乃至識が粗・細であるという場合には、あくまで存在論的又は認識論の立場から説かれているのに対して、涅槃が微細であるという場合にはそういった経験的な問題を離れた、より一層思弁的な意味で述べられていると考えるべきであろう。

先の『瑜伽師地論』卷第八十七の「極難知故」というのも、単に知覚し難いからというのではなく、同じく『瑜伽師地論』卷第六十五において、

即是此中五相。滅有為法証得涅槃。若謂涅槃為有異者。當知此為不如理問不如理答不如理思。如是若謂為無異者。有無異者。非有非無異者。當知皆是^①不如理問不如理答不如理思。

と述べていることから考えて、不如理思、つまり「我々の思考とは結びつかない思議」、「理屈では考えることのできないもの」という意味で解釈すべきである。

『毘婆娑論』によると四念住は瑜伽師の説であるとされている。『瑜伽師地論』では観想法としての四念住が先に存しており、それに則して五蘊の順序を組み換えたものと思われるが、ただこの五蘊の順序、色・受・識・想・行に関してはジャイナ教の聖典 *Sūyagaḍaṅga* の註釈に仏教の説として引用されており、当時ある程度一般化されていた順序であるかもしれない。

(イ) 色・識・受・想・行という順序

『瑜伽師地論』の5つの説明の内、第一番めの生起所作では色・識・受・想・行という五蘊の順序が説明されている。

生起所作者。謂眼色為縁能生眼識。乃至意法為縁能生意識。此中先説色蘊次説識蘊。此則是諸心所所依。由依彼故受等心所生故次。經言三和故触。触縁受等。是名諸蘊生起所作宣一説次第。^②

つまり、眼（根）と色（境）を縁として眼識が生ずる。その様にして意識に至るまでの六識は、いずれも各々の根と境とを縁として生じてくる。根と境とは色蘊のことであるから、まず色を説き、次に識を説く。そして、その根と境と識というのは諸々の心所の依り所となるものであり、経にも「三つの和合を触といい、触は受（想・行）等の縁となる」ことを説いているので、色・識の次に受・想・行を説くというのである。この説明は言いかえれば、五位説の基盤となる色・心・心所の順序と言えよう。

この色・識・受・想・行という五蘊の順序はヴェーダーンタ学派の巨匠 Śaṅkara (AD. 700~750頃) の *Brahmasātra Śaṅkara-bhāṣya* 2. 2. 18 を見ると、説一切有部の見解として

tathā rūpavijñānavedanāsaṃjñāsaṃskārasaṃjñakāḥ pañcaskandhāḥ/^③

同様にまた色・識・受・想・行と名づけられる五蘊がある。

と述べている。また、同じくヴェーダーンタ学派の Mādhava (AD. 1350頃) が書いた *Sarvadarśana-Saṃgraha* では、

so 'yaṃ cittacaittātmakāḥ skandhāḥ pañcavidho rūpavijñānavedanāsaṃjñāsaṃskārasaṃjñakāḥ/^④

その心・心所から成る蘊は5種類であり、色・識・受・想・行と名付けられるものである。

という説を経量部の見解として述べているのである。

Mādhava や Śaṅkara が仏教の説を正確に伝えているか否かについては不明であるが、経量部説との関わりが強いと言われる『成実論』では、五受陰（五取蘊）が苦であることを説明して苦諦聚（三十六~九十四品）を色・識・受・想・行の順序によって説明している。仏教内において、この順序を取るものがいたことは間違いない。そして、それがいずれの部派であれ色・心・心所という五位成立の基盤となるものであることは明らかである。

註① 大正30, p. 596a.

② 大正30, p. 596a~b.

③ 大正27, p. 384b.

④ *ABHIDHARMA KOSĀBHAṢYA of VASUBANDHU*, ed. by P. Pradhan, Patna 1967, p. 15, ll. 11~13.

⑤ 大正30, p. 596b.

⑥ 大正30, p. 596b.

⑦ 大正27p. 384b~c.

⑧ *AKBh*, p. 15, ll. 13~15.

⑨ 大正30, p. 596a.

⑩ 大正27, p. 938a.

⑪ 大正27, p. 939b.

⑫ 大正27, p. 384a~b.

⑬ 大正30, pp. 790c~791a.

⑭ 大正30, p. 662c.

- ⑮ W. B. Bollée, *Stedien zum Suyagada*, wiesbaden 1977, p. 73.
⑯ 大正30, p. 596a.
⑰ *Brahma-Sutra Śaṅkara Bhāṣya* ed. by K. L. Joshi, Delhi 1981, pp. 523, l. 4~524, l. 1.
⑱ *Sarva Darśana Saṃgraha*, ed. by T. G. Mankar, Poona 1978, p. 39, ll. 10~11.
⑲ 大正32, pp. 239a~373b.
-

インターネット公開許諾のない文章には墨塗り処理を施しています。